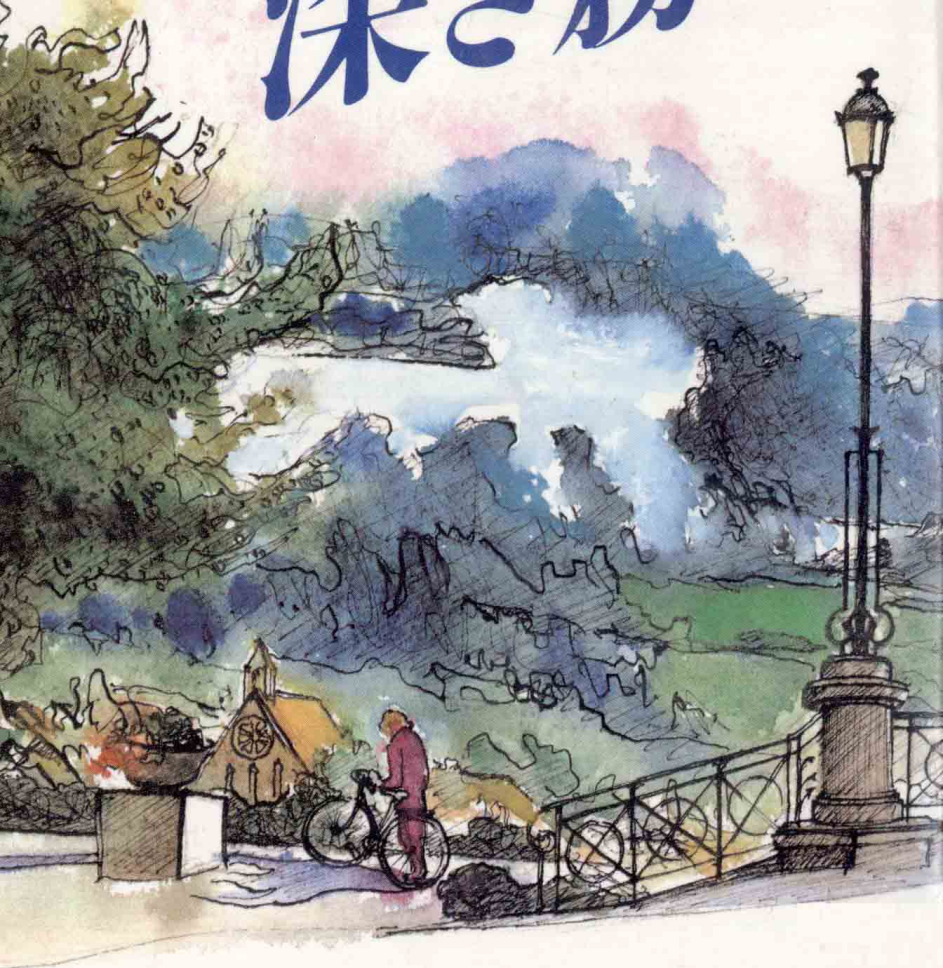


森屋耀子

霧のヌイヨンス 深き





森屋耀子

《著者略歴》

森屋 耀子（もりや ようこ）

本名、長森光代

1922年、東京に生まれる。63年、渡仏し、アリアンス・フランセーズ、ソルボンヌなどで学び、66年に帰国。71年に再びフランスに渡り、一年間パリに滞在後、ブルゴーニュ地方のクールトワ村で六年間過す。78年に帰国。

著 書 『ブルゴーニュの村便り』（中公文庫）

歌集『野のマリア』（椎の木書房）

歌集『幻日』（新星書房）

住 所 東京都渋谷区笹塚2-42-4

イヨンヌの深き霧

1986年11月30日 印刷

定価1,500円

1986年12月10日 発行

著作権者との
申合せにより
検印省略

著 者 森 屋 耀 子

発行者 竹 内 淳 夫

発行所 株式会社 彩 流 社

〒 102 東京都千代田区富士見2-2-2

電話03 (234) 5931 振替・東京9-55239

印刷 明山印刷+原田印刷

製本（有）青 木 製 本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

0093-938-2900

イ
ヨ
ン
ヌ
の
深
き
霧
／
目
次

河恋い 7

田園監視人 47

七つの水門 101

默劇 139

『イヨヌの深き霧』によせて

久保田正文 229

イ
ヨ
ン
ヌ
の
深
さ
霧

河恋い——イヨヌの深き霧

中庭の、村で一番のマロニエの大樹の下に、俊子の車は停めてある。

車を外へ出すためには、中庭を隔てて母屋と向かい合っているもう一つの棟の二階の、展也のアトリエの下を通らなければならない。

平生ならば、その前に先ず、鉄格子の門の門を外して、扉を両開きにして置く。そのとき扉の蝶番が、髪切り虫の啼くようにギーッと軋んで鳴る。展也が窓から顔を出す。そして言う。「どこへ行くんだい」

ところが、その夜は全く幸いなことに、扉が最初から開け放してあった。毎週金曜日の夕方から、サンス市の両親の家へ出かけることになっている家主夫妻が、閉め忘れて行ったものと見える。

母屋の二階に住んでいる家主夫妻が留守ならば、俊子の行動を目撃している者は一人も居ない筈である。そう思うと、俊子は展也と一緒に大っぴらに旅行に出かける時のような気楽さで、黒いビニールのポストンバッグを車まで運んだ。

歩けば必ず鳴る中庭の砂利の音も憚^{はば}らなかった。耳ざとい展也ではあるが、この位のことですに降りては来ない、窓の下を素早く通る車の響きに気が付いた時はもう遅い——という勘定である。

車の所まで来ると、マロニエの若葉の繁みの中で、乾いた麦わらが触れ合うような音がした。車の真上のあたりに巣ごもっている鶺鴒^{ひよ}の、音とも言えぬかすかな身動きの気配である。音と言えば風の音しかないこの村の、夜の風さえその夜は死んでいた。

エンジンがかかると同時に、俊子は車をバックさせて、一気に門を出た。

どこへ行くという宛ては無いのであった。どうしても行きたいという町も家もなかったが、車が二、三分で忽ち県道に突き当たってしまったので、そこで先ず、左右いずれに折れるかを決める必要があった。車を運転している者の心理としては、曲り角で車を停めてゆっくり考えるという訳にはゆかない。

県道は、五、六十センチに伸びている広い麦畑を中に挟んで、イヨソヌ河と平行している。道を右にとれば、河を遡^{さかの}ってゆくことになり、左にとれば、河を下って、パリの方角へ進むことになる。「パリは厭だ」という思いが、咄嗟に俊子の頭の中にひらめいた。と、すれば、右に折れるより他なかった。

ハンドルを右に廻した俊子の臉の裏で、イヨソヌ河の源流のグルヌイエットの花の群がりが輝いた。日本では梅鉢藻とか梅花藻とか言われている、水草の花の輝きである。

俊子がイヨソヌ河の源流を訪れたのは、五年前の、同じ季節であった。

展也も一緒であつた。展也は運転が出来ないから、俊子が行きたいと思う所へ、行きたいと思う時にしか行くことが出来ない。俊子が、その河の源流を一目見たいと言い出して、そこへ行つたら、展也も行かれたのであつた。

そこは、俊子たちの村から百キロ以上隔たっているニエーヴル県の山中で、交通の極めて不便な所である。鉄道は遠い。バスも通っていない。そこへわざわざ、水草の花を見に行く人は居ないのである。

流れは花で埋まっていた。流れに花が咲いているのではなく、花のカーペットの底を水が流れているのであつたから、流れは水の色ではなく、花の、雪の色をしていた。六月の木洩れ日の色に染まっている、暖かい雪の色であつた。

花の雪は、花の根や茎をくすぐる水と、兩岸のはしばみの若葉に戯れている風のせいで、絶えずゆらめいていた。ゆらめきながら、くねりながら、白い花の帯が、はしばみの林を縫ってゆく。

（あそこへ行つて見よう）、車が右へ廻りきつて速度を上げ始めたとき、俊子は考えた。

十時はずっと過ぎていたが、空中にはまだ、物の色や形をかなりはつきりと示すことのできる明るさが漂っていた。行く手の丘陵の頂の教会のシルエットがくつきりと見える。

だが、そのまま百キロの夜道を走ってゆく気は、俊子には無かつた。どこかで車を停めて、その中でひと先ず夜を明かす積りであつた。

車は七、八分でサンスに出た。イヨンヌ河の橋を渡り、市街地を過ぎて、国道を南に向かった。プラタナスの並木が、両側からこんもりとした枝を延べて、緑のアーケードを作っている。

二キロばかりで並木を抜けると、道は、下りの長い坂になる。路傍に薔薇の花壇が設けてあって、肉色や牡丹色の花の盛りであった。花壇が尽きた辺りで、草の間の細い小道を右に曲り、二百メートルかそこら下ってゆくと、イヨソヌ河の岸に出る。

岸の箱柳^{ハコヤナギ}の林の中に、俊子は車を入れた。

展也と一緒によくやって来た林である。展也はそこで写生をしたいからと言って、いつも俊子を誘い出したが、いざ来てみると、風が強過ぎるからとか、霧が深過ぎるからとか、今日は釣をする人が多過ぎて落ち着かないからとか言って、描く方は早々に切り上げた。草に足を投げ出してお弁当を食べたり、釣をする人と無駄口をきいたり、その村に多いバリジャンの別荘を見て歩いたりする方が、余計すぎなのであった。

対岸にも箱柳の厚い林が迫っている。水が箱柳の根を洗っていて、こちらの岸のように、人の通れる道がない。そのせいであろう。箱柳の梢という梢ぜんぶに鳥が巣を作っていて、いつだったかの秋の夕方、鳥の声はすさまじかった。

あれは、鳥の子供の声かもしれない。

数百人の赤ん坊が同時に締め殺されているような声だ、と俊子が言ったら、締め殺される時は一瞬だ、泣き声なんか上げるもんか、と展也は言った。

その鳥たちも死に絶えたかのように、林は唯、夜の闇の罫^{おかし}になっただけ。

俊子は車のエンジンをとめ、ライトを消して、後のシートに移った。あとは、寝る事と考える事しか、する事がなかった。

手間も暇もかからなかった。シートに横になり、体を海老のように丸めて、スコッチの毛布をか

ぶった。土が近い感じであつた。機能を停止している車は、夜の内に、俊子もろとも土に同化してしまふのではないかとさえ思われた。

さすがに直ぐには寝つかれなかつたが、早く眠りの中に逃れたいという、普段のような焦りはなかった。死の平安を待ちながら、最後の生を肯定している病人の心境とはこんなものかと思つた。やがて、神経の回線の網の目が、縛れたり、ほどけたり、外れたり、また、元に戻ったりするようになって来た。大腦を眠りが襲つたり去つたりしているのである。気が違う前も或いはこんなものかと、俊子は考えた。まだ母の胎内の闇の中で、じっと息をこらしているような不思議な心地でもあつた。

この反復を五、六回繰り返している内に、回線がどこかでポツンと切れつ放しになることだろう。(いや、今晚は十回以上かな、それとも夜じゅう繰り返すかな)と俊子は考えていた。

「キョーキョキョケ、ピーピピピ、キョケ」

不意に、耳もとで啼いているように間近な、夜鶯ジョウロウの声で眼が覚めた。

眠りこけた積りはなかつたが、かなり長い時間が過ぎていたのだ。大氣が、暁の靄もやの色で白く濁つていた。

夜鶯はその名に反して、真夜中には啼かない。終日、燃え続けた太陽が、最後の光芒の房をきららかに飾りながら落ちてゆく時刻とか、或いはまた、紫陽花色の朝の兆しが、虚空と大地の接点から生まれて、紫陽花色がローズ色に、ローズ色が金蓮花色にと輝きを増し、やがて、金蓮花色が芙蓉色に、芙蓉色が林檎の花の仄ひそくない色にと再び薄くなつて、遂に無色の日光と化してゆく時刻

に、最もはしゃぐ小鳥なのである。

「ケッキョッキョケ、キョーキョケ、ピッピビビ」

夜鶯の声のこの勢いで計れば、夜明けは遠くない。

人目に付くのが厭だったから、すぐ出発した。そこで夜を明かしたことを、誰にも知られたくなかった。

街道に出るとホッとした。迷わずに右折して、ふたたび続くプラタナスの並木道を、ヴィルネーシュに向かって走って行った。

ヴィルネーシュまでの三十キロは勝手知った道である。

町外れの小さな駅の近くに、「銀の鶯鳥」という、この地方では少し名の知れたレストランがあって、毎年五月、展也の誕生日に、ここで食事をするのが二人の慣らわしであった。

俊子の誕生日は大晦日だが、展也はいつも、元旦の零時にならないとそれを思い出さない。フランス人の習慣を真似て、新しい年が明けた瞬間に、二人が接吻し合うその時はじめて、「あっ、きのうはあなたの誕生日だったなあ」と、展也は言う。「お祝いだから日延べしてもいいんだらう。銀の鶯鳥へ行こうよ」とも言ってくれるが、その頃はもう、俊子の気持は白けている。あらかじめ、自分から言い出す気もないのであった。

レストランはキャフェも兼ねていて、駅前のささやかな広場に臨むテラスを張り出している。広場をめぐる、桐の木が十本ばかり植わっていた。

一日に上り下り各三本しか列車が停まらない駅であるから、広場はいつも森閑としていた。桐の木はフランスには珍しい。今年も「銀の鶯鳥」へ行った帰りに、俊子は広場で桐の花を拾っ

た。「そんなものを拾ってどうするの」と展也が笑った。「どうもしないわ、拾うだけよ……」と俊子は言つて、照れくさそうな、後めたような顔をした。

（あの桐の花がまだ咲いているかも知れない。あそこのキャフェで朝食をとろう）と俊子は思った。

深い靄が四方を包んでいた。車のライトを消すことがなかなかできない。明けてゆく速度が、この朝だけ狂っているような気がする。走っているのは俊子の車だけであつた。

この辺りは両側共、果てしない麦の畑の筈であるが、靄の奥で一面の水が鈍く光っているようでもある。道は、間違える氣づかいもない、一直線の道である。おかしいな、とは思ひながらも、停まつて確かめる氣にはならない。一度走り出した車の運転者とはそういうものである。

それにも拘わらず、ものの五キロかそこら走つたばかりの地点で、俊子が、側道の芝の上に車を乗上げて停まつたのは、そこを歩いている一人の男の姿が氣になつたからであつた。

男は、ただ歩いているのではなかつた。顔と胴と脚は前向きで、つまり普通の状態で前進していたが、左手だけが水平に道路の方へ伸びていて、その先に半紙ぐらいの大きさの白い紙がひらひらとしていた。それだけならば、頭がおかしい人かとも思うだけだが、男は、頑丈そうな体を押しつぶされそうにして、リュックサックを背負つていた。一目で分かる「オート・ストップ」である。

俊子は警戒心が強い。男を拾う積りは毛頭なかつたのだが、既に何時間もの立ちん坊の末、どうでもなれと諦めた様子、前のめりの、歩いているというよりは、風に靡なびいているだけのような恰好の男が、左手で捨て鉢はちに示している「PARIS」という文字に引つかつたのであつた。

男が車に近づいて来た。

俊子は窓のガラスだけ下ろして、窓ごしに、「あなた、本当にバリへいらっしやりたいの」とたずねてみた。

男は、そうだ、と答えた。

走る車からチラッと見た時は、オート・ストップにふさわしい二十代の学生だと思ったが、面と向かってみると眼を疑った。中年の、五十がらみの、大学教授風の男であった。二、三センチ後退している額の髪の生え際と、頬から頤^きに至る線の二重の乱れの分だけ、二、三十代の人よりも顔が大きく見えるが、同じ分だけ、人柄の大きさと温かさが滲み出ている。

俊子の態度が自然に変わった。

「それでしたら、あちら側でお待ちになった方がよろしいのではないのでしょうか」

余計なおせっかいだと思ったが、口の方が先に動いていた。

「たしかにそうなのですが、あちら側ではもう一時間以上、車が一台も停まってくれなかったのです。そこへあなたの車がやって来るのが見えたものですから」と、男は言った。

それならば、なぜひとところ止まって合図していなかったのだろう、と俊子は思った。しかし、男が立ち止まって手を上げていたら、車を停めなかっただろう、とも思った。

男はそこまで計算に入っていたのだろうか。それとも、俊子の車にも大した期待を寄せていなかったから、あんな投げやりな歩き方をしていたのだろうか。

「よろしかったらお乗り下さいませ」

俊子はまたもや、迷うより先にそう言って、助手席のドアを開いていた。

男が車に乗り込むと、直ちに車をＵターンさせた。